寶訓文彙

全

伊
1837

伊
門 1837
蘭
巻 1-1

宝訓文をかきあつめ〳〵故よ〳〵
ヨゞ皇典ゝ。悉ふ神皇の萬姓を治めまに。御を
〳〵へ書ふしあれど。人〳〵ゝむ者い。其をうゝぐ
ひ知りて。身のかどゝ〳〵ふ。勤め守ヲ順ひ奉る
べきこと。云も更かゆ。然いあれど。今の世ふし
てい。本書ヲ悉ふうゝぐひ知ることは。ゐゝや
をゝ〳〵ぬ業ふ〳〵あれば。其ゞ中ヨヲ。吾かみ士
庶人のそれまゝふ。子弟を教ふる手便よかれ

る條〻をら。本書の中とゆ書抜あつめておを
るふ。日本宝訓。枕草紙。その餘れ書よりめ抜萃
して。かく一巻をいあせるれ。おお善言美詞
を見出るまゝふ。書添ふべくおん。忠行おるに。

元治元年甲子十一月六日

寶訓文彙

角田忠行敬緝

皇産霊大御神。諸の詔命以て。伊邪那岐命。伊邪那
美命。二柱大御神ふ。此くゝよゝる国大地おゆを。初
くゆ固先成せと。事任し給ふ。これ御教言の起元ふて。世れ万事
万物も。おれよゆぞおゆ出々る。
天神皇産霊尊。太占ふト合大祖天御中主尊の。大御心を問奉ゆ給ゑるおゆ。て。
二柱神ゑ教ゑ給ゑく。女の言先ごつも良いぞ。
男は左ゑ上ふ立ち。女も右ゑ次ふ従ゑよ。高皇産霊尊
尊も。男神ふて先ゑ生まし。神皇産霊尊も。女神
にて後ゑ生ませる謂ふよゆて。都て男も上ふ

先ず女を下ゆ次ず立ちて左を上とし右を下とせるも天御中主大御神の立ましへる道なめ二柱神初て御合ませる時ず去をいかやまり給ふる故ず更ふ教ふ給へるなり

伊邪那岐命詔く。天照大御神を高天原を治せ

し須佐乃男命亦御名を滄海原潮の八百重を

知らせべし。天照大御神ふい日球とる高天原

めし給ふとかれはず須佐乃男命ふい地球ず

君ゐらしめよと事依し給ふるかり滄海原潮

れ八百重は地球万国の古称かり故ふの大御

神等れ御子命御代ゝ大君とはましはもかり

伊邪那美命詔く。火神の荒びせを水神匏埴山姫

川菜を以て鎮め奉れと事教ふ悟し給ふ。此を火災

を禦ぐ術ず教ふお

きて給へるかり

天照日大御神宇氣母智神れ御躰ず生れる物等を見そかはして詔く。お

れ物等を。うつゝき青人草の食て活べき物ぞ

を宜ひて乃ち粟稗麥豆を陸田つもれ稲を水

田つ物とかし。ふと因ふ天邑君を定め。即ち其

稲を以て天の狹田長田ず殖て其を火食を保

事を得しめ。まゝ天香山ふ桑を殖ふ養蠶し。口

裏ふ蚕を含み絲を抽きはとおを衣縫ふ業を

得しめ給ふ。

又大地をして詔く。豐葦原中国を我ゞ御子の知ぎく

無窮を王を坐をべき国ぞ。

又天太玉命ず詔く。諸部の神等を率ゐ。其職る職あり。ふ仕奉ることと。天上の儀天照大御神の朝延れ儀式をいふ。れ如くせよ。

又詔く。天下四方の人民たみを吾が御寶ぞめ。

須我大神詔曰。から国ふ。天皇命れ用ゐ給ふ。ぎもれの国。其地貢げたむる便ふとて。杉を楠とを生して。船を作らしめ給ふ。其時をもに生し給ふる檜を。宮殿の枝ふ用ひ。被を棺れ枝とたを。しと教ず給ふ。おお嗽べき八十木種。及び萬木をめ生し給ふ。

大名持命。少名持命。教曰。父母は尊き物ぞ。妻子ぃ愛しむべきものぞと詔ひて。いとも厚五倫の道を教へ給ふ。

須勢理毘賣命の神語。わが大国主神ぃ。男ふいませむ。うち見る嶋のさきく。かき見る磯の前くおちば。若草の妻ゎ。せら兄。我ぃ女ふしあきば。君をおきて。男たかし。夫ぃ那し。

神武天皇詔曰。戰ひふ勝て驕らぬぃ。良き將れ行ひぞ。

又詔曰。大人の制を立るは。義のからば時ふ従ふ。

苟ふも民を利あらば。何ぞ聖造ふ妨ほらむ。耳
當山林をひらき。宮室を經營て。元こ以鎮むべ
し。上は乾靈の国を授け給ひし德ふ答へ奉り。
下は皇孫れ正を養む給ふ御心を弘め。然て後
六合を兼ね都を開れ。八紘を掩て宇と爲む。亦
可ゝらずや。

又詔曰。我皇祖天、御中主尊より。御代〻の御祖をいふ。の御靈。天より
降鑒して。朕ゞ躬を助け給ふ。今諸れ虜ども
已に平ぎて。海内事なし。天神即ち皇祖等。を祭て大
孝ゆせむとて。祭の場を鳥見の山中ふ立て。皇

祖天神を祭り給ふ。

倭姫命詔曰。きよかき心をくして。丹き心を以て。
清く潔く齋ひ慎み。左の物を右ふ移さば。右の
物を左ふ移さば。左を左やし。右を右とし。左ふ
歸て右ふ廻る事も。よろづ違ふ事をくして。元
をはじめとをるい。本をもとゝをる故ぞ。

又詔曰。神魂尊の精靈。父母れ氣ふ入て。生産る神
を。人神と申ば。吾黨の體中ふ坐ば神なり。

又詔曰。咎ある者い黄泉国に往く。咎をきものい
常世国ふ歸る。

神功皇后詔（御軍令なり）曰。金鼓ときどめかく。旌旗まがひみだるれば。軍人ども〳〵のたじ〇財をむさぼり欲おもく。私をいだ内ふ顧みせず。敵のせめことおりてむ〇敵少くともいかどる事弱く。強くとめ恐るゝ事かりれ〇あさかふ者た。か聽しそ。自ら服ひぬる者ハ。か殺しそ〇戰ひ勝つ人ふハ。必ず賞あるべく。ふげ走る者た。必ず罰ひらむものぞ。

八幡大神詔曰。我国ハ天地れ分れしよりて以來。君と臣と定りき。天日嗣ハ皇統を立てよ。臣を以て君とする事ハ。ふつふ非ず。無道れ人た早く除くべし。

繼體天皇詔曰。良將の軍は。恩を施し惠を推し。己を怒し人を治む。攻るハ河れ決るが如く。戰た風の發るが如し。

宣化天皇詔曰。食ハ天下の本那り。黃金萬卷も飢を療すべからず。白玉千箱も何ぞよく冷を救はむ。

孝德天皇詔曰。凡そ政を致さむと欲するもれた。君も臣も。まづ己を正しくして。ちを後て人れ

正せ。若自ら正さずして。何ぞよく人を正さむ。慎まざるべからむや。

又詔曰。神ながら。神ながらとは。神の道に隨ふ。亦自ら神の道あるを云ふ。吾御子治しめしを事任し賜ふ。是を以て天地の初より。君臨れ国かゝ。初国知らしし皇祖の御世より。天下大同都ふ彼此かきものぞ。

天智天皇詔曰。万人を助々むと思ふものゝ。一人は罰を。万人を殺さむとおもふものゝ。一人は罪をゆるゝ。朕つねふ万人の爲に心を苦しめ。よむ言葉の末までも。皆くるしみの万人を思ふ外かし。国の父母として。何ぞ国土は子を思はざるべき。子をして父母は教ふるがごとかゝれ。

天武天皇詔曰。上下を齊和して。動こと風なく静かあらしむるかい。禮と樂と二は並べてし。平けく長く有るべきし。

元明天皇詔曰。天地の共。かぎりなく遠く。常典を改免じを立てまつる。食国は法を傾おとなく。動こを明らく行はむと思ふに。云こ。遠皇祖の御世を始め。天皇の御世こゝ。天日嗣と高御座ふ坐て。

おの食国れ天下を撫給ひ慈給ふ事い辭立て
あらば人の祖れ己がとく子を養ひ治むる事
れ如く治め給ひ慈み賜ひ來る業をかも神か
ごら念おもを

元正天皇五節舞を見そはして詔曰今日行賜ふ態を見て
かたきは直き跡とのみふいあらばして天下
れ人は君臣祖子の理を教給ひ趣け給ふとふ
有るらしとかもれもかも

聖武天皇群臣詔曰君臣祖子の理を忘る事なく
天皇の御世〻〻ふ明く清き心を以て祖の名

を載持て天地と共に長く遠く仕奉れ云〻

又詔曰高天原も天降ひ坐し天皇の御世を始め
て おの天官に御座まして天地の八方を調へ
給ふ事は聖君を坐せて賢臣供奉め天下平け
く百官安くおて天地の大かる瑞ひ顯れ來る
とかも神かごらかもかに

光仁天皇詔曰天つ神国つ神を祭るは国の大か
るみヒぢかめもし誠もて敬ひ奉らばい何を
以て福を致さむ

桓武天皇詔曰天下を治め給ふ君い賢人の能き

臣を得てし。天下をば平らゝく安らゝく。治め給ふものゝあるらしーとかも聞しめに。云こ。凡そ人の子れ福を蒙らまくもゝる事い。親の爲ゝ

ゆをかも聞しめに。

嵯峨天皇詔曰。食国の天下れ政も。ひとゝ知べきもれゝいゝらば。必も後方(レリヘ)の政あるべしと。古ゝを行ひ來ることぞ。皇后を定めてし。閫中の政い成るもれとかも。常も聞しめもゝ。ちれば臣民も。此ゝ習ひ奉りて。操行正しき婦女を娶て。戸主とし。家事を治めむる事。古代よりれ例ゝ有ける

又詔曰。朕より後の人主ゝ示ゝもかゝり。国土れ邪氣のもれを罪せむゝゝり。万人の貧乏事をはゝらひて。苦しみを救ず。惡人い消失かむ。諸の人れ惡きふるまひをかゝに。周く今日(アケヌ)送を兼る。ゝよりれ起る事を。国家ゝ惡人ゆて源かく。ゝゝ天地の養をして。空く世を渡るにあるもれかを。愚ゝ賤きものゝ。直乏心れなきはおとりゆかを。直ゝるぼき人主の。直ゝらぬ故かるべし。

花園天皇詔曰。朕つねゝおのれを責て。臣を責めば。故ゝ天理能をゝりぬ。おのれを思ふ心を以て。近臣及び万民を思ふふるゞふ事かし。君とゝ

もれあざ〳〵き心ふて。一生送らむ事こそ口惜
き事なれ。人の鏡とは身れ。人のいましめとか
らむ事を。誠ずかげうしき事なるべし。後孫よ
く辨ずを知れて。天皇命れ道明らうふ〳〵て。天地
をを久しのはべし。

後小松天皇詔曰。夫天下れ主をしては。民と共ふ
樂み。民と共ふ苦を。神明の誠を身方とし。奇翫
を敵をとる時ハ。国ふ悲みの民おく。国ふ遊客
れ諸侯おし。賤がうちにも心をよせて賢ぜも
ちひ。貴きがうちにも邪おるを捨はときハ。天
地と久〳〵はべし。

後宇多天皇詔曰。夫世の人れ人おはものゝおき
事や。常ふ人れ惡説をばをく語ゑ傳ふ。善事ぜ
ハ露(アラハ)し傳ずば。朕つねふ人れあやをれ傳ずぜ
心ふ留めぞ〳〵て。その人れ言と行の合をを不合
をを見て。ちを後ずロふ出をのみおべて世中
れ人の惡き事を。人よろこびを面を和して語
はは事こそかを〳〵れ。

正親町天皇詔曰。昔れ人ハ末世の人れ爲ふ書を
著し。今の世の人ハ身れ爲ふ書を隱を愛ひる

處もひとつふて。用るゆゑろい各別なり。
後陽成天皇詔曰。古のごろ儒佛を學ぶもの多く
ありて。神書を知るもの少し。物本末あり。事終始
あり。何ぞ本を捨て末をとらむ。神國をおいて
爭ふ神書を疏ぜむや。萬機の政もなほ神事ぬ
以て最第一とす。但し神代の事理をでふ幽微
なり。理ふ非れば通ぜじ。
永福門院宣く。世に悲しきもけあり。道ふ志深ぬ
人ぬ貧しきと。愚なる者のとうら多きと國ぬ
司ふなるもの、慈悲けなきと。名高き人の世ふ
もきて。賤しきと交ゆをるゆゑなり。これ悲しぬ
ものゝ至ゆなり。
敷政門院宣く。貴となく賤となく。女の何事ふめ。
物ふちゝいゝへして。心得ゐるさまをとるは
必ず二心なるものなり。恥うしぬ事ふこそ。な
べてむうしをゆ女いはうなきもけふ。男の
いろゝいひをろふふい。百人い百人なゞう
もゞくる心いできて。長きうき名を流そもの
なゆ。こけおうむきふ心をつけて。骨い粉ふ碎
ぬ。をゝむうは泥ぬなほとも。名ぬおもむ女

い。道を守るべき事なり。人をもて好む方ふ。あ
やまりていりといふことを知るべし。好まざる
方ふい。いやまりはなきものなり。
大塔宮護良親王奏言。浸潤の譖。膚受の愬。事小禍を
もて起りてみな大ふ及ぶ。乾臨何ぞ古をひきて
今を鑒(カンガ)みざる。

大伴氏、祖神、言立。海行かむ水づく屍。山行かば艸
むすかばね。大王の邊ふこそ死なめ。のどふい
死なじ。
秋山(フキヤマ)之下氷壯夫(シタビヲトコ)の母教曰。我御世の事能こそ神
習ふ。又うつしき青人草習ふむや。
物部、大連尾輿公。中臣連鎌子卿奏曰。我国家を恒
ふ天つ社国つ社の。百八十神を祭ふ以て事と
せ。改て蕃神胡鬼佛なり。を拜せば。恐らくい国神天神
地祇を云ふ。の怒りを致さむ。

又曰。何ぞ国神ふ背き奉ㄟて。他神胡鬼なり。を敬せむ
や。もとより斯の如き事を知らば。
捕鳥部萬主絶命の語。萬た天皇の御楯をかりて。
勇を効さむを欲ひしものは。
蘇我倉山田石川麿公絶命語。死てめかお忠をた
もはむ。
忌部廣成宿禰曰。祖を尊び宗を敬ふは。禮教ㄟ先
ふをるをころかり。
天満宮宣く。我世ふあㄟし時常に願へるは。後ま
我如く慮の外ㄟ禍ふ遇む人。をべて心誠ふ行
ひ正しㄟ人ㄟ侘悲むをば助々救む。人を沉め
損ぜむ者をば紀を身とからむと願ひしに。思
ひの如くかㄟとり。
藤原鎌足公曰。吾惟一の神道ハ。天地を以て書籍
をし。日月を以て證明とㄟ。是をかはち純一無
雜の密意かり。故ㄟ儒釋道の三ㄟㄟ教を要と
用ふ。ㄟ。ぢるもㄟをり。然れどめ唯一ㄟ潤
色として神道の光華とし。廣く三教の支學ㄟ
存し。專ら吾道の淵源を窮究むもㄟハ。まと何
の妨ゥあらむ。

藤原武智麿公曰。かべての人。かゑふもくだ〳〵
しくくるはしき事を談るぼうらびぐ。その心ふ
かめと云ことなるし。心ふ偽ゑ一ゑぐあれば。必
ぐ時ゐゑて外ふ出るかめ。おれ天の心れ内外
に行ゑ〳〵めゑるゲ故かめ。此事を知らむもの。
爭うふどれ法心あらむ。

藤原小黒麿卿曰。人として一言も惡を語るべう
らぐ。物を損し人を失ふこと甚し。大人と天下
ふ及び。小人ハ里鄉ふ及ぶもれかめ。如是もの
は。必ぐ天地の神ふくみて亡そものなり。恐る

ゑし。

藤原永手公曰。善心を好みて常ふゐるもれハ。そ
のようる事を樂む。惡心を好ミて常ふあるも
れハ。その惡うる事を樂む。それ樂む所を一ゑ
かめ。その善事と惡き事は。ゐ免つちと隔れめ。

和氣清麿卿曰。諸の罪科を改むるよめ消え失せ
ぬ。諸の善ハ修しぬるよめ次第ふまして。後ふ
ゑ国家ふみつるもれかめ。

小野篁卿曰。世ふ人のうらむる心はそれ去〳〵し
きよゑおとるかめ。去〳〵しのらぢるふハ。恨心

おしぢれば道をおもふよゆ。善惡の言葉あり。
人の毀譽はいるものかゆ。
藤原家良公曰。人貧しき時は必ず信あゆて。富榮
えぬれば私ごとて僞多し。これ富てはよろづ
心のまゝあるべきふ。僞いとむとふはあらね
ど。貧窮の時は人こゝふあやしめられじと。心か
らば道を守ふ事おおし。富てをろづ人を用い
ふるを私事なゝまばば。心からば道の心かくな
り行て。おごれるふゆのみ多し。貴とかく賤と
なく。常ふ心を入ゆ知るべきは專一あゆ。

藤原經忠公曰。人の急難を救ひ。貧窮はものを
そけ。去とれとるをはこし。やぶれふしをゆり
あつふものは。必ず天これを佑(たすけ)て。その名四海
にあふまで。子孫も永くとして榮えぬること。是
天下は常ふゆ。今の世かくの如きは人あり。と
いへども。皆身の爲ふして。天地の心をいらね
ばその名隣家も知らず。
藤原公任卿曰。人間第一の後悔といふい。始をいら
つくせば。終をゆくしまばるをり。是より諸の
事おこゆ待るもはあり。

藤原通憲朝臣曰。人苦しみの中に苦しみを樂しめば。くるしみなし。貧苦を樂めば貧苦なし。天地の間に物とたて樂まぬといふことなし。

菅原高能卿曰。ひとりみ山に住む人は。見ぬ世の人を友としてあうしくらすもれた雨風のはげしきふも心をろことばしらぬ日いはし。唯むかしの人こそ。ちびたきなどいふ先る事なり。

菅原茂長卿曰。皆人ふるふし人のもてはやそびぬる珍奇を求る。見ぬ世れ人のうとみとしてといふかくいふもちる事あれど。むかし今見ぬ人れかとみふは。一筆の跡のみぞまことなきこのゐみ。とそれ人れ面ゐげなる。殊にあつうしきいなれふし筆れ跡見ふゐびふ。身をたる雨の袖をふるうゐ事。誰もかく有たとふや。

藤原政忠公曰。人を一生のうちおのれい是なにれ道をよくおもべきをおもひとりて。万事れやめて一事をおこゝびおをし。必しも天下の寶とおるべし。むかしく光陰をおくれるは。宗廟のいゐ給ふ道なる。おろ〳〵しみおもひ

をるべきれ第一なり。

藤原雅親卿曰。師木嶋の道を行人も。其心をおも
ふし。白き衣ゐ墨繪の村千島つけて。紅れうら
をけ。帯をくろうはべし。劔を腰ゐ横さへも。
をゝのゐあゆを出。おもひよはべれそのうと
に。ゐゞ一筋。ようちいでゝ。思ひしことかおへ
ぞ。やゞをかへるゞをし。よろづ心ふうけて。かけ
ゞゝてくゞくゝをれ事。見聞くばうらば。大空
の月れちやゝき心地ゝてぞのらむ。

藤原公行公曰。人うゑにも惡人と知て。はじはゑ

物いふゞをうらば。物自然とそむる事。これ天地
の常ゐり。善人めゝまゝくゝかくれ如し。古人の
いひし。花中の鶯をそれ聲はおなゝ絲どかむ
ばしといゐる事もこれ謂ふや。

藤原隆繼卿曰。人をを去て幸不幸い。天をゑめ與へ
ぞ。地をゆも與ゐば。幸ゐあるはそれつとむる
所よゑゐる。不幸をゐい。それ拒をめぢるよゆ
れこゐ。愚ゐるもれいをとめ行なくゝゞ。ふ外
ふ向て求るのみ。

平重盛公曰。むゝろ忠臣をゐゑて死をとも。逆臣

とかくて生きぞ。又云く。德を以て人ふ勝もれは昌え。力を以て人を勝つものゝ亡ぶ。

藤原藤房卿曰。賞それ功ふ中れば。忠あるもの進み。罰その罪ふ當まざ。咎のるもの退く。又云く。天の災を見ては。いまゞ棄ぢるれば。災ふ逢て改めざれば。天永くされを棄つ。故ふいまゞ天の時。人の和のゆて興らぢるものゝあらば。天棄人畔て亡びざるもれもあらば。

藤原兼良公曰。人惡を顯明の地ふなせば。帝王これを誅し給ひ。人惡を幽冥の中ふなせば。鬼神されを罰し給ふ。善をなし福を得るも。亦されふ同じ。

良忠殿法印曰。無道を誅せむ爲ま隱謀を企ることを更ふ疎忽れ義ふのらば。云く。普天の下王土ふ非ぞと云ふとなく。率土の濱王民ふ非ぞと云事なし。

藤原師賢卿曰。主憂ふれば則臣辱をられ。主辱めらるれば則ち臣死をといふ。縱ひ骨を醢ふせられ。身を車裂ふせらるとめ。傷むべき道ふのらぞ。

藤原資朝卿北條賊ゞ爲ふ斬られ給ふる時。其子阿新殿ふとて。書殘されし文ふ曰。

和翁屈平の楚思を懷き。八回優游以て今日ふ至る。汝ゞ爲ま言を爲に。秋霜三尺曾て貞松を埋めゞ。士も之見て眼睛を豁開を洒〻落〻ひとゆ乾坤れ間ふ立つ。

源親房卿曰。御國も天祖經始の地。日大御神統領の州ふ。聖〻相承。授受ゑゞはゞ。云〻。おれふ依て上神代の古〻を。下人皇れ今ふ及ぶ。國家を傾々むと欲をほもれも。必ゞ種類を絶つ。世れ知るところ。誰ゝ敢ておれ疑もむ。

橘正成卿曰。義れ爲ふ身を顧みぢるは。忠臣勇士の所存ふ。

橘正行朝臣其弟正之朝臣と四條の畷ふて。絶命語。古ふ云く。臣をしてい忠ふ死し。子としてい孝ま死をと。我兩人の謂を。相與ふ自殺に。

源義貞朝臣曰。叛を討ち亂を撥ひ。義貞ふらざれゞ不可を。自ら名を義貞といふ。弟小次郎ふ謂て曰く。吾義を舉げゞ。則ち義宜く助をふせ。廼ち之を名々て義助をいふ。

橘正季朝臣絶命語。七生までめ同じ人間ふ生れ

て。朝敵を亡さむと思ふ。正成卿同断。

橘正勝朝臣曰。賊將源義満。降を勸めけるゆ。答て。吾不肖なれども。祖父正成の遺訓を守りて。世々忠義を盡せり。いかで不義れ富貴を貪るべき。

平信長公曰。我一日片時も。枕を泰山の安きゆおうべ。一命を輕じ粉骨を盡し。私欲を去り士れ勞ゆ代り。偏ゆ四海の逆浪を治め。王道の衰を興し。風を移し俗を易て。再び政教を無窮ゆ垂れむと欲するもれなり。

豐臣秀吉公曰。日本は神國なり。神をおはち天帝。天帝卽ち神なり。全く差ひあらし。されゆ依て國俗風度。王法を崇め。天ゆ體し地ゆ則り。言あり令ゆ行ひ。然りといへども。風移り俗易りて。朝命を輕じ。英雄權を爭ひ。隣國分崩せ。予云々。壯年に及び。夙夜世を憂ひ國を愁ひ。聖明を神代ゆ復し。威命を萬代ゆ遺さむと。されを思ふて止まず。

輝子曰。藤原利仁卿室。男子は女ゆ遠ぎうる心ゆらば。此人たゆからば道を得ることは近きなりと知るべし。

相摸曰。或説ゆ相摸守大江公資女。或云妻。吾身ゆよき人をとくお

もひうとき人をうせく思ふ。扨孫の事あり此外ふ心を入て。ヒきまへ知る為に事あヒ。後人ふゆづるなヒ。

赤染衛門曰。赤染時用女。実は平兼盛女。心れにとおきものは。心をうごかして身を安んぜ。上智れ人も。心を安んじて身を安んぜば。おべてれ人の安んぜ為に苦しめくるむべき扨安んぜるが故ふ。一生心のまゝあらば。

民部卿局曰。藤原定家卿女。かみつうとは。うからば無理宜ふものとおれば恨みおし。おもつうとい。必

びおろうかほものと知れば。吾ふいうヒおし。

小督局曰。高倉宮女房。あやおき事を語るは。うからば。それ心の正しうらぬ人のいふ事おヒ。あゞ常ならむぞよろづ違ふ事多し。

明子曰。藤原伊長卿女。心ふ徳ゐれば。よろづ心れまゝおる事も。人おゆて。それ徳を多む事をば。知ほ人おし。故ふ智慧才覺のみヨとゝりて。一旦おを事あり。天の心から孫ば。夏雪れ如し。

經子曰。藤原尹房公室。一座の興ふも。いれえゆがましきはかしい。一言もゐるはおき事なり。一言いつ

もゆをいへば。万言これ偽りをあるもれなり。
ものまづ心をうつみ出て。口ふていふもれか
れば。はこをの人ふ。あをぶれれ謂ひらむや。は
づゝしれ事ふこそ。

清少納言曰。清原元輔女。人ふああづるゝものあま
り心よしと人ふ忘られさる人○心あをく
ゝき女。

又曰。ふくきもれ。いそぐ事ひるをゆふ。長ぶとを
る客人○火桶をびつかどに。手れ裏うちのへ
し。皺うちのべかど〳〵て。あぶゆをるもれ○酒

のをてあゝき口を探り。髭ひるもれ。それを
あで〳〵。盃人ふとゝをるかどのけしき。いみじ
くふくしをを見ゆ○物うらやみし。身の上かゞ
き。人の上いひ。ゆゞのり事もゆゝしゞり。
聞まかしゝり。て。いひきらぬをび怨じ識ゆ。ま
ゝ僅ち聞りとふ事をば。吾もとより知ゆとる
事のやうふ。他人ふも語りきちへいふも。いと
ふくし○物きゝむと思ふかどよ。かく子○遣
戸あどあらく明るも。いとふくし○物語かど
をるに。ちし出て我ひをゆちいまぐるもれ。を

ゐてちし出た。童も大人もいとふくし。昔物語
ゐど失ふは。我ゐ見しらるるはふと出ていひ
くゐしゐどをる。いとふくし○あゐちちまふ
來とる。子どもうらはべを勞とゞ見て。おゐし
紀物ゐどやうを失るふゐらひて。恒ゐ來て居入
見てあとゆふ引ちらしゐる物は。手ふれそ〳〵
き居とるふくし○文詞ゐめき人こそいとゞ
ふくゞれ。世ゐのめふ書流しゐる詞ゐふく
ちとそちるまじきと人の許ゐ餘見畏ゆとゐも。
げふとろき事ぞちきど吾ゞ得とらむい理ゆ。

人の許ゐるさへふくゝこそゐれ。大ゐとちし
むゐひても。ゐめきいゐどゐくいふらむゆ。ゐ
とはらいとし。まして紀人ゐどを。ち申ゐも
れた。ちるいをこふていとふくし○をとこ。從者
ゐ主ゐどゐろくいふいとゐろし。我ゞつゐふ
者ゐど。ゐた見る。れしとまふゐどいひとる。いゆ
ふくし。
又曰。ふげゐ紀もれ。あゐき手を赤き紙は書とゐ。
又曰。とゝへゐきもの。同じ人ゐゞゐも。心ぢし
失ぬるは。まことふ非ぬ人とぞおゞゐるゐし。

又曰。ものゝ。舅ふかめらる〳〵聟○まゝ
姑ふ思はるゝ。よめぎみ○主そ〳〵らぬ。人の從
者○扨もれくせうとはふくて。かゝち心ぢま
めゝぐれて。世ふ在など。聊のきざなれ人○同
じ所ふ住む人の。互ゝ恥らはゝ。聊の隙なく用
意ゝとめと思ふゞ。終ふ見えぬこそかゝゝれ。
○物語集など寫ゝ本ふ墨つゝぬ事○よき双
紙などは。甚じく心ゝてかけどめ。必こそきゝと
なげふなゝめれ○男も女も法師も。契ゝ深く
てかゝらふ人の。末まで中ゝれ事のゝし○扨

このひよれ從者。
又曰。かゝもらいゝされもれ。客人などに向むて物
いふふ。奥の方ゝうちとけ言。人のいふを制せ
で聞く心ち○思ふ人れ醉て同じこゝゝ事ゝ
○聞居ゝるをもゝうで。人のうゝいひゝ。そ
れゝ何ぞゝゝならぬ扨ゝひ人なれど。ゝゝは
らいゝし○旅ゝちゝる所。近き所などにて。げ
そどもれぢゝはしゝる○ふくげなゝ兒扨。
己ゞ心ちふ愛ゝおりふゝ〳〵ふ。うつくゝみ遊
ばゝ。おれゞ聲れまねふて。いひゝゝ事など語

ゑある○才ある人の前ふて。才かた人の物覺
えゞおふ。人れ名かどいひゐる○こをふよし
ともおぼえぬ我歌を。人ふ語ゑきゝせて。人れ
かめし事かどいふめゝとはらいとし○人の
起て物語かどをそる傍ゑ。あさはゑうちとけ
て寢(ネ)とる人○まゞ音(ネ)も彈(ヒ)きと〳〵のつぬ琴城。
心ひとつやゆて。ちやうれゝと知ゑつる人れ
前ふてひく。
又曰。あさましれものゝ人れ爲ゑはづゝきこと。
つゝみもれく兒(チゴ)も大人(オトナ)もいひとふ○むゞふ

知らゞ見ゞきゝぬ事を。人のちしむゝひて。あ
らゞはをべくもかく。いひとふ○もれうちこ
がしゐるめ。あちゃまし。
又曰。何れかるものゝ。孝ある人の子。
又曰。むとくかるものゝ。えせものゝ從者(ズサ)かむゞふ
ふ○おきれのもゝぐゑをかちたる○人れ妻(メ)
かどれ。もの怨(エン)じゑて隱をゐふをゝ。かゝらゞ尋
ゑさゞむもれをと思むとるに。ちしも思ひ
ゐらゞ。ねとげふもてれしとるゑ。ちをもえ旅(タビ)
どちゐとらねゞ。心といで來ゐふ。

又曰。はゝとかたもけ。こを人を呼ぶふ。我ゝとて
ちし出るるもけ。やまして物やらにをめい。いと
どおのづゝ人のうへなど。うちいひそゝ
おどもをとほを。幼き人けきゝやりて。其人の
ゐる前ふいひ出るほ○哀なる事など。人のい
ひてうちなくふ。げまいとあれとは聞かぎ
ら。泪のふつといで来ぬ。いとはゝとれし。なき
ぎおかくめ。けゝきことにかせど。いとこのひか
し。めでとけ事を聞くふい。とゞ出きふこそ出
くれ。

又曰。とゞ所なきもけ。かとちふくげま。心あゝき
人。
又曰。人ぞえをるもけ。おとなる事なけ人の子け。
のれゝくをからをれとほ○咳。はづゝゝき人
ふ物いはむとをるふも。まづ先ざつ○あかと
これとふをむ人け子どもけ。四つ五つなるは。
ゐやふくざちて。物など取ちらして損ふを。ほ
ふい引はられなど制せられて。心の儘ふめえ
あらぬが。親け來ゐる所えて。ゐゝしがゞとをる
物を。あを見せよや。母など引ゆるがをふ。おと

かれど物いふとて。ふゞも聞いれねば。手ぢの
ら引さがし出て見るこそ。いとふくゝれ。それ
はまちかとばゝゆうちいひて。ゞゞゝくさで。
ちかせそぎとかふをとばゝゆ。ゑみていふ親
めふくし。われえはしさかくもいとで。見るお
そこゝろもとかゝれ。

又曰。わろきもれい。詞の文字あしく遣ひあるかこ
そあれ。こゝもじ一はよやしくも。あてにめ。
いやしくもかるは。いゝかるふゝらむ。ちる
はかう思ふ人。よろづれ事よ去ぐれても。えら

らじかし。いづきはよきあしはとは。ゑかふゝ
らむ。ちゞとめ人を知らじ。こゝちうちおが
もるもいふめゆ。難義れ事はいひて。其事をちか
せむとにといえむとといふは。ともじを失むて。
あゞいえんぞる。里へ出んぞるかどいつば。や
ゞていとゞろし。まして文をゝきてい。いふべ
きふもらじ。物語こそあゑうゝきかどそき
む。いひゞひかく。はくゞ人さへいとかしゝれ。
かかに定本れまゝかど書付とる。いと口をし。
ひてつくかまふかどいふ人めらわは。もとむ

といふ事を。見むとみれいふめり○いとあや
ちなる事を。男おどは。さげとつくろいで。おとち
らふいふいはゝ〜うゝび。我詞ふもてけてい
ふが。心おとりをする事おり。
又曰。見ならひをほもれ。あくび○兒(チゴ)ども○おま
けゝらぬえせもれ。
又曰。うちとくまじしたもの。惡(アシ)と人ふいはる〜人。
ちるは善(ヨシ)をおちられとるよりを。うらおくぞ見
もる。
又曰。見ぐるゝ〜ちもれ。きぬの脊(セ)ぬひ片よせて著(キ)
とる人。まとのゝくびおとほ人○例おらぬ人
れ前ふ子をゐていきゐる○袴着とるとらい
のあゝぐをはきゐる。それをいまやうれもの
なれ○ちがちうぞくおとものゝ。いそぎを
あもみとほ。

官許
明治六年七月
辻梟家藏版
製本所
京都　菅廼舍池邨氏
菅廼舍